鹿 病 防 第 ３６ 号
令和８年 10 月 29 日

各関係機関の長　殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和８年度病害虫発生予察情報について

このことについて、発生予報第８号（11 月）を発表したので送付します。

鹿 児 島 県 病 害 虫 防 除 所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
　　099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149

ホームページアドレス：https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujosho/index.html

メ ー ル ア ド レ ス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

１.使用する人の安全	使用者自身の健康管理、安全使用
２.作物に対する安全	適期、適正防除で薬害防止
３.農産物に対する安全	消費者へ安全な農産物を供給 （農薬安全使用基準の遵守）
４.環境に対する安全	周辺環境への影響防止 （周辺住民等への危被害防止） （河川、湖沼、海等への汚染防止） （養蚕、養蜂等への危被害防止）
５.保管管理の安全	保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

令和８年度 病害虫発生予報　第８号

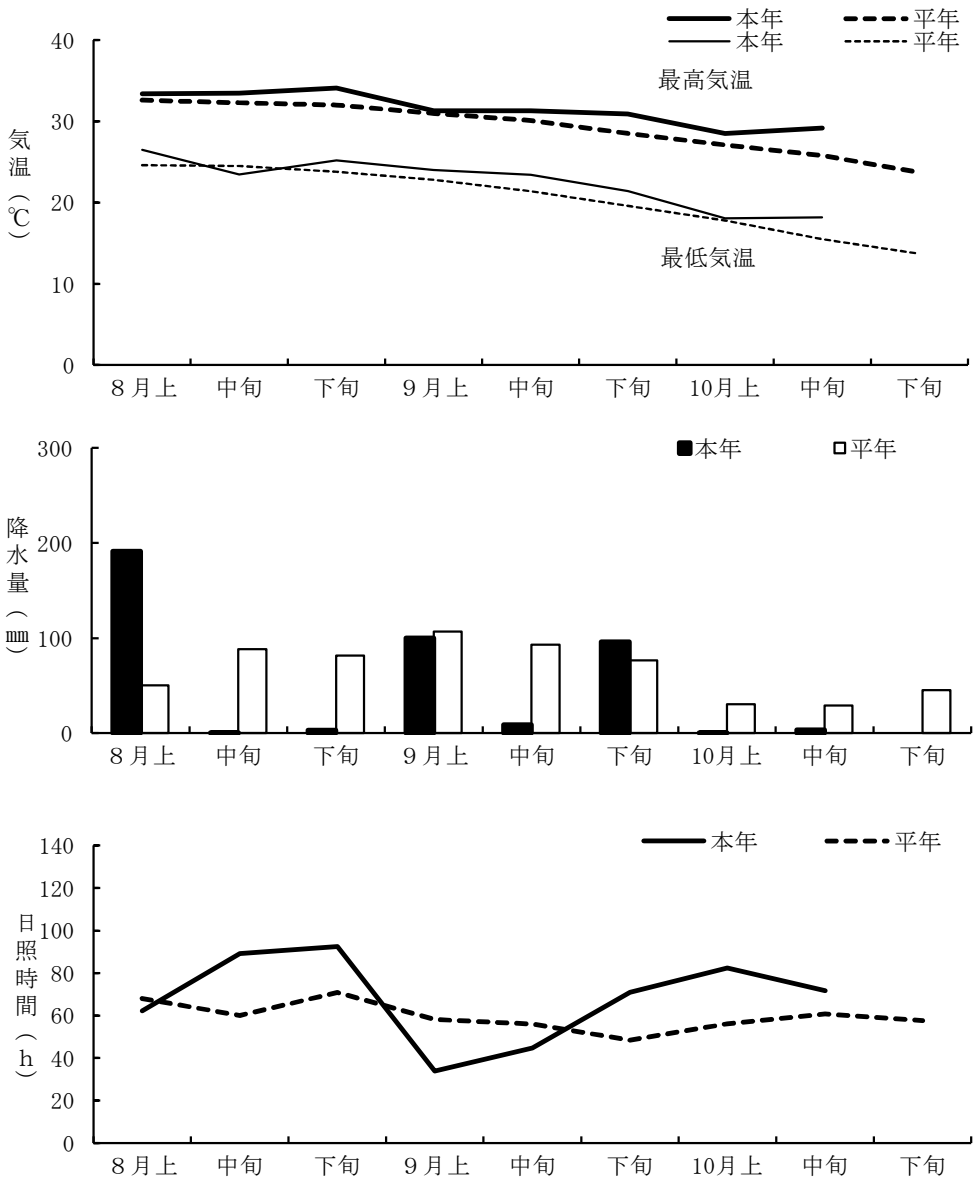
令和８年10月29日
鹿児島県病害虫防除所

【気　象　概　況】

Ⅰ．向こう１か月の予報（10月24日～11月23日）　令和８年10月22日　鹿児島地方気象台発表

要素	地域	確率（%）			概要
		低い(少ない)	平　年　並	高い(多い)	
気　温	九　州　南　部	１０	２０	７０	九州南部、奄美地方ともに気温は高い。九州南部の降水量は多く、奄美地方はほぼ平年並み。九州南部の日照時間は少なく、奄美地方はほぼ平年並みの見込み。
	奄　美　地　方	１０	２０	７０	
降水量	九　州　南　部	２０	３０	５０	
	奄　美　地　方	３０	３０	４０	
日照時間	九　州　南　部	５０	３０	２０	
	奄　美　地　方	４０	３０	３０	

Ⅱ．８～10月の気象情報（鹿児島地方気象台　観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
野菜	キュウリ	うどんこ病	やや少	やや少
		アザミウマ類	並	やや多
		コナジラミ類	多	多
	トマト	コナジラミ類	並	やや多
	ピーマン	斑点病	やや少	並
		アザミウマ類	多	多
		タバココナジラミ	多	多
	イチゴ	うどんこ病	やや多	やや多
		ハダニ類	やや少	並
		アザミウマ類	多	多
	エンドウ類	うどんこ病	並	並
		ハモグリバエ類	やや少	並
		アザミウマ類	やや多	多
	キャベツ等アブラナ科野菜、エンドウ類、トマト、ピーマン、イチゴ等	ハスモンヨトウ	少～並	やや多
	キャベツ、エンドウ類、ネギ類	シロイチモジヨトウ	やや多～多	多
	キャベツ、エンドウ類、トマト、ピーマン、イチゴ等	オオタバコガ	並～多	多
花き	キク（施設）	ハダニ類（県本土、施設）	多	多
		アザミウマ類（県本土、施設）	並	やや多
		〃 （奄美地域、露地）	少	やや少
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）	やや多	多
		〃 （奄美地域）	多	多
		黒点病（県本土・熊毛地域）	やや少	並
		〃 （奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	多	多
		〃 （奄美地域）	多	多
茶樹	チャ	カンザワハダニ	多	多

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

Ⅰ．普通作物

防除に関する今月の留意事項

１．サツマイモ

（１）サツマイモ基腐病

発生が見られたほ場では、次年度の発病リスクを軽減するために、収穫後に以下の防除対策を徹底する。

＜本ぽ、種いもほ場＞

（収穫後の残さ対策）

ア　屑イモやしょ梗は、次作の伝染源となるため、収穫後速やかにすき込みを行う。

イ　すき込み後も定期的（１回/月程度）に耕耘して、残さの分解を促す。

ウ　本病が多発したほ場では、次作はサツマイモ以外の作物への輪作や休耕を検討する。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、以下を参照してください。

鹿児島県

サツマイモ基腐病防除対策マニュアル（第４版）令和６年３月改訂

（https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20240315133011-1.pdf）

農研機構

サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和４年度版）

（https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04.pdf）

農研機構

「本圃におけるサツマイモ基腐病発病リスク低減技術」マニュアル（令和７年３月）

（https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/168484.html）

野　菜

１．キュウリ

（１）うどんこ病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　促成栽培

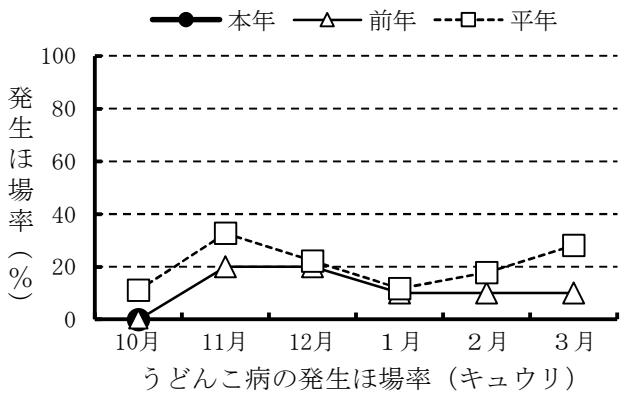
（ウ）発 生 量　　やや少

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：やや少

発生ほ場率０％（平年 11%）

：やや低い



うどんこ病の発生ほ場率（キュウリ）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）多発すると防除が困難になるので、ハウス内の見回りを行い、早期発見と初期防除に努める。

（イ）発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。

（ウ）農薬は、下位葉や葉裏に十分付着するよう散布する。

（エ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（２）アザミウマ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　促成栽培

（ウ）発 生 量　　やや多

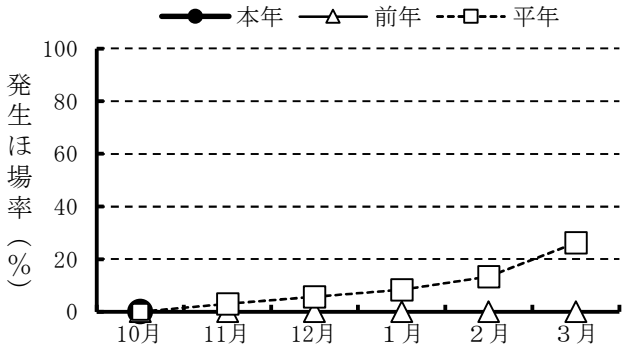
イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率０％（平年０％）：並

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



アザミウマ類の発生ほ場率（キュウリ）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）アザミウマ類は、キュウリ黄化えそ病（ＭＹＳＶ）を媒介する。ハウス開口部（サイド等）等に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。

（イ）天敵を放飼するほ場では、放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、放飼前に防除を徹底する。放飼後は天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（ウ）農薬は、葉裏にも十分付着するよう散布する。

（エ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（３）コナジラミ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

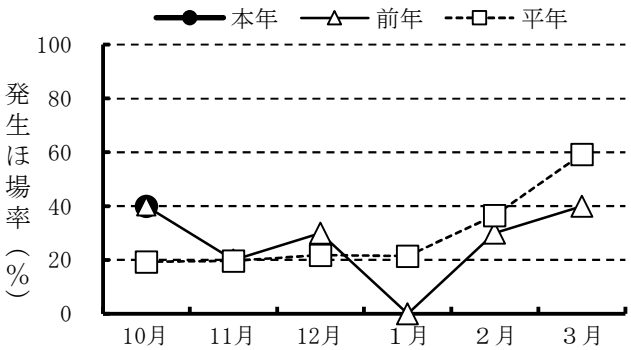
（イ）対象作型　　促成栽培

（ウ）発 生 量　　多

イ　予報の根拠

（ア） 調査結果　発生量：多

発生ほ場率 40%（平年 19%）：高い



コナジラミ類の発生ほ場率（キュウリ）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）コナジラミ類は、キュウリの退緑黄化病（ＣＣＹＶ）を媒介する。生育初期に本病が発生すると被害が大きくなるので、黄色粘着トラップを設置して早期発見と早期防除に努める。

（イ）天敵を放飼するほ場では、放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、放飼前に防除を徹底する。放飼後は天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（ウ）農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。

（エ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

２．トマト

（１）コナジラミ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　促成栽培

（ウ）発 生 量　　やや多

イ　予報の根拠

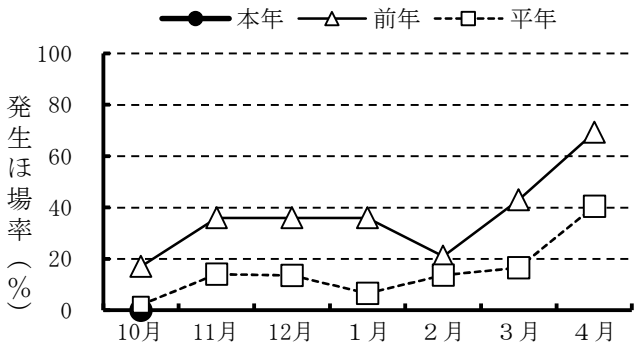
（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率０％（平年２％）

：並

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



コナジラミ類の発生ほ場率（トマト）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）コナジラミ類は、トマト黄化葉巻病（ＴＹＬＣＶ）を媒介する。生育初期に本病が発生すると被害が大きくなるので、黄色粘着トラップを設置して早期発見と早期防除に努める。

（イ）天敵を放飼するほ場では、放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、放飼前の防除を徹底する。放飼後は天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（ウ）農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。

（エ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

３．ピーマン

（１）斑点病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　促成栽培

（ウ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

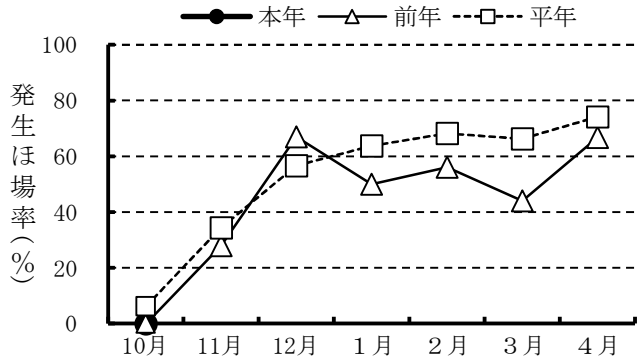
（ア）調査結果　発生量：やや少

発生ほ場率０％（平年６％）

：やや低い

（イ）気象予報

降水量：多い（＋）



斑点病の発生ほ場率（ピーマン）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。

（イ）発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。

（ウ）成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

（エ）多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

（オ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（２）アザミウマ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　多

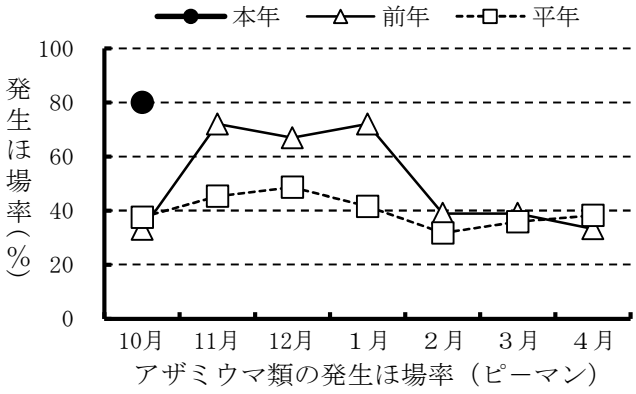
イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：多

発生ほ場率 80%（平年 38%）：高い

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）ハウス開口部（サイド等）等に粘着トラップを設置し､早期発見と早期防除に努める。



アザミウマ類の発生ほ場率（ピーマン）

（イ）花や新芽の中など農薬が付着しにくい場所に生息するので、散布は丁寧に行う。

（ウ）天敵を放飼するほ場では、放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、放飼前の防除を徹底する。放飼後は天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（エ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（３）タバココナジラミ

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　多

イ　予報の根拠

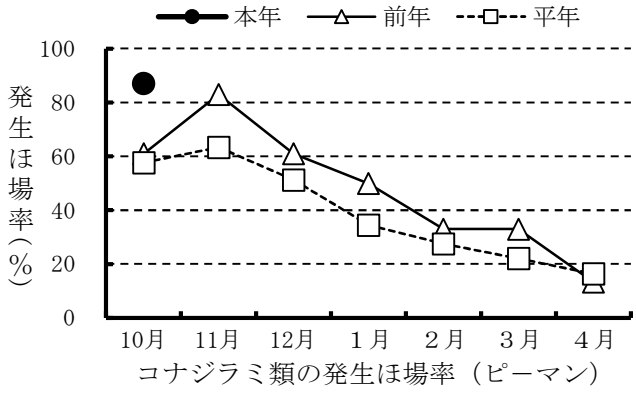
（ア）調査結果　発生量：多

発生ほ場率 87%（平年 58%）

：高い

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）多発するとすす病を発生させるので、黄色粘着トラップを設置して早期発見と早期防除に努める。



コナジラミ類の発生ほ場率（ピーマン）

（イ）天敵を放飼するほ場では、放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、放飼前の防除を徹底する。放飼後は天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（ウ）農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。

（エ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

４．イチゴ

（１）うどんこ病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

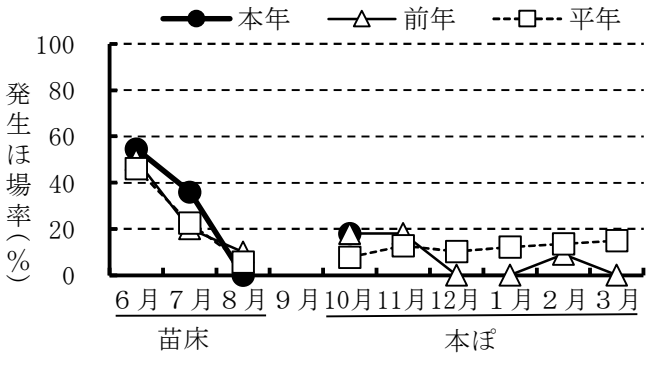
（イ）発 生 量　　やや多

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：やや多

発生ほ場率 18%（平年８%）：高い

発生程度は低い（－）



うどんこ病の発生ほ場率（イチゴ）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）防除は予防に重点を置く。農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。

（イ）上位葉に発生しやすいため、葉裏をよく観察し早期発見と初期防除に努める。

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（エ）発病葉などは早めに除去し、施設から持ち出して処分する。

（オ）窒素肥料の過多や葉が混み合うと多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。

（２）ハダニ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

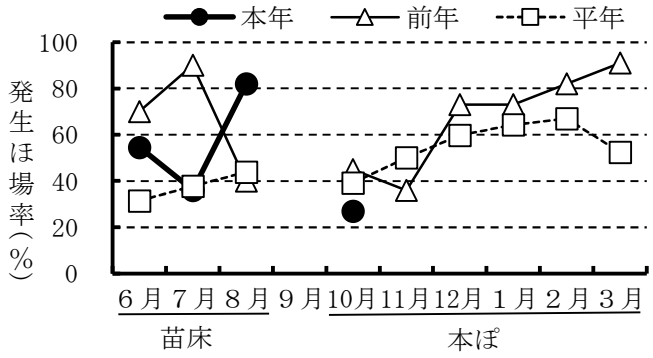
（ア）調査結果　発生量：やや少

発生ほ場率 27％（平年 39％）

：やや低い

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



ハダニ類の発生ほ場率（イチゴ）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）天敵を放飼するほ場では、放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、放飼前の防除を徹底する。放飼後は天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（イ）農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏に十分付着するよう散布する。

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（エ）農薬によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。

（オ）農薬によっては、天敵やミツバチに影響があるため薬剤選定に注意する。

（３）アザミウマ類（令和７年度技術情報第 11 号，７月 31 日付け参照）

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　多

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：多

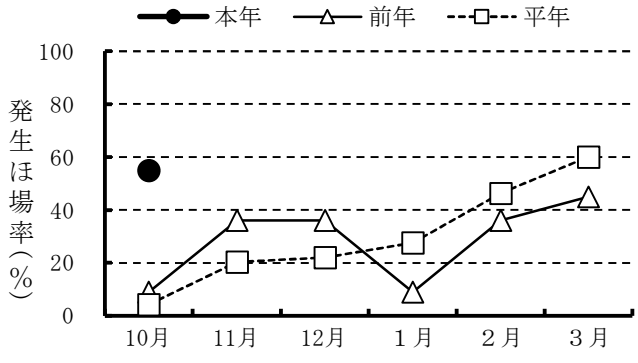
発生ほ場率 55％（平年４％）

：高い

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）ハウス開口部（サイド等）等に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。

（イ）花や新芽の中など農薬が付着しにくい場所に生息するので、散布は丁寧に行う。



アザミウマ類の発生ほ場率（イチゴ）

（ウ）天敵を放飼するほ場では、放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、放飼前の防除を徹底する。放飼後は天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（エ）農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。

（オ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（カ）農薬によっては、天敵やミツバチに影響があるため薬剤選定に注意する。

５．エンドウ類

（１）うどんこ病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率０％（平年２％）

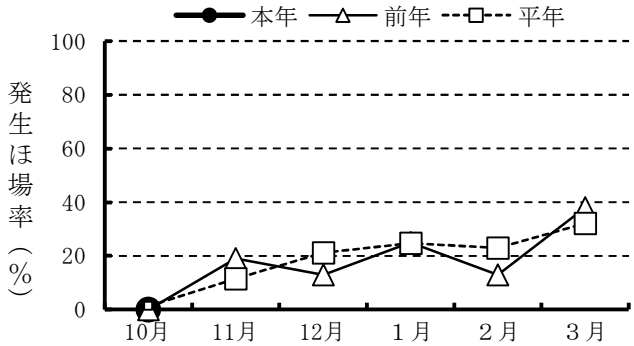
：並

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）多発するとごま症の発生につながるので、発生を認めたら直ちに防除を行う。

（イ）農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。



うどんこ病の発生ほ場率（エンドウ類）

（２）ハモグリバエ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：やや少

発生ほ場率０％（平年 17%）

：やや低い

（イ）気象予報

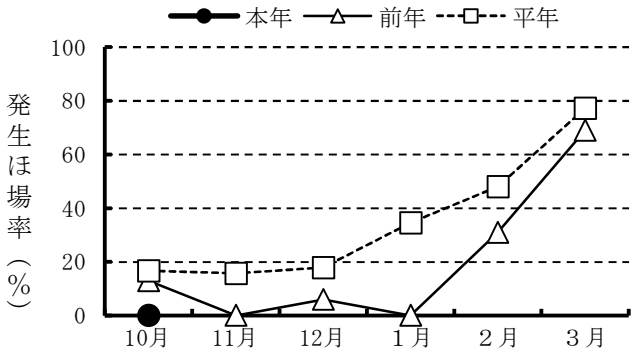
気温：高い（＋）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）多発してからの防除は困難となるので、早期防除に努める。

（イ）農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。



ハモグリバエ類の発生ほ場率（エンドウ類）

（３）アザミウマ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　多

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：やや多

発生ほ場率 13%（平年２％）

：高い

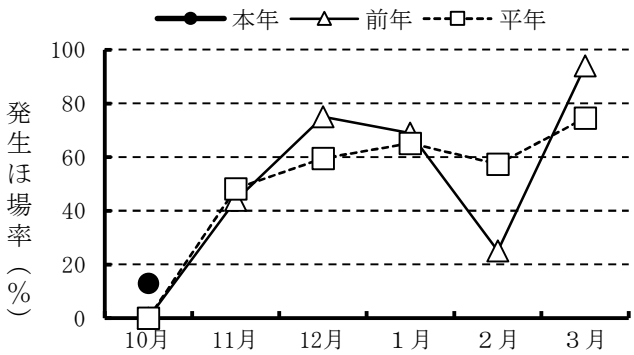
発生程度は低い（－）

（イ）気象予報

気温：高い（＋）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）エンドウ類で主に発生する種類はハナアザミウマである。若莢に産卵し、「白ぶくれ莢」となるので、若莢の被害や青色粘着トラップへの誘殺から発生状況を把握し、早期防除に努める。



アザミウマ類(被害莢)の発生ほ場率(エンドウ類)

（イ）農薬の付着しにくい花弁の奥や若莢に寄生するので、丁寧な農薬散布に努める。
（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

6．野菜共通

（1）ハスモンヨトウ

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作物　　キャベツ等アブラナ科野菜、エンドウ類、トマト、ピーマン、イチゴ等

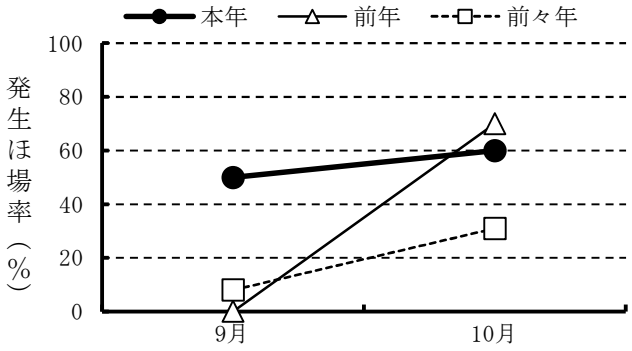
（ウ）発 生 量　　やや多

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：少～並

作物名	発生ほ場率（%）			概評
	本年	前年	平年	
キャベツ	8	33	22	やや少
ダイコン	60	70	-	並※
ハクサイ	0	63	-	少※
エンドウ類	0	50	32	少
トマト	0	0	5	並
ピーマン	7	22	10	並
イチゴ	36	45	30	並

＊ダイコンは令和５年度から、ハクサイは令和６年度から調査のため，前年比による概評を記載



ハスモンヨトウの発生ほ場率（ダイコン）

9～10 月のフェロモントラップ総誘殺数：やや少～並

	南さつま市	鹿屋市
発生量	並	やや少※
総誘殺数（９月６半旬～10月５半旬）	11,327頭（平年9,759頭）	8,223頭（17,716頭）

＊鹿屋市は令和６年度から調査地点を変更したため、前年比による概評を記載

（イ）気象予報

気温：高い（＋）

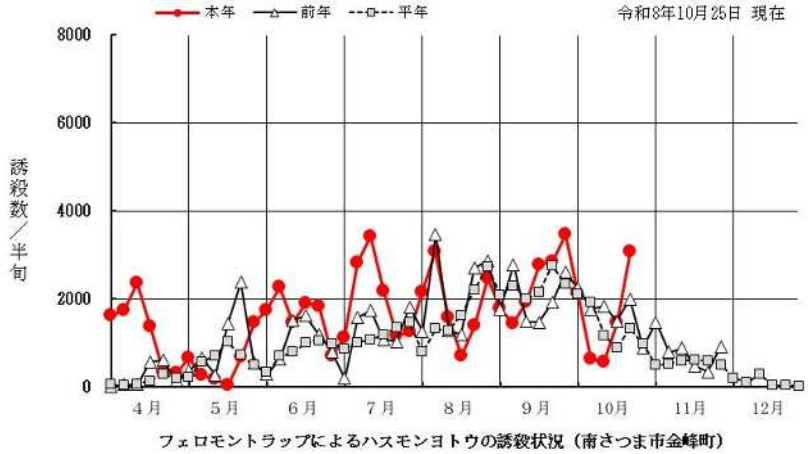
ウ　防除上注意すべき事項

（ア）若齢幼虫は集団で表皮を残して食害し、 白変葉を生じるので、ほ場を見回り早期発見に努める。

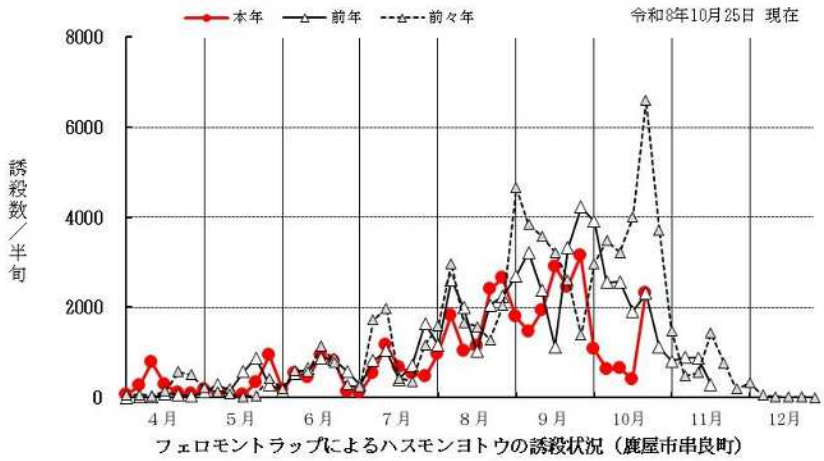
（イ）卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。

（ウ）中・老齢幼虫になると農薬の効果が低下するので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。

（エ）ジアミド系農薬に対して感受性低下が認められる。他の使用農薬も含め、散布後の効果を確認する。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況（南さつま市金峰町）



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況（鹿屋市串良町）

（２）シロイチモジヨトウ（令和８年度技術情報第 18 号、10 月 29 日付け参照）

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

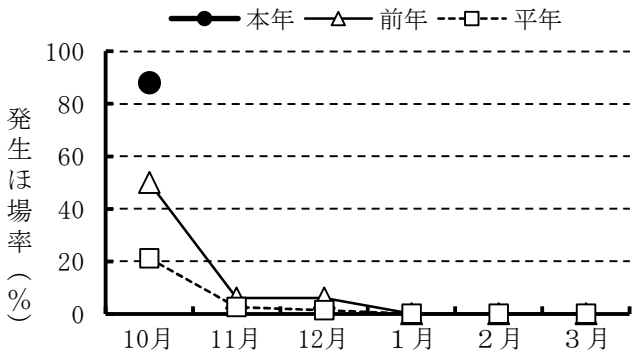
（イ）対象作物　　キャベツ、エンドウ類、ネギ類

（ウ）発 生 量　　多

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：やや多～多

作物名	発生ほ場率（%）			概評
	本年	前年	平年	
キャベツ	8	0	2	やや多
エンドウ類	88	50	23	多



シロイチモジヨトウの発生ほ場率（エンドウ類）

９～10 月のフェロモントラップ誘殺数：多

	南さつま市	鹿屋市
発生量	多	多※
総誘殺数（９月６半旬～10月５半旬）	540頭（平年114頭）	185頭（30頭）

＊鹿屋市は令和６年度から調査地点を変更したため、前年比による概評を記載

（イ）気象予報

気温：高い（＋）

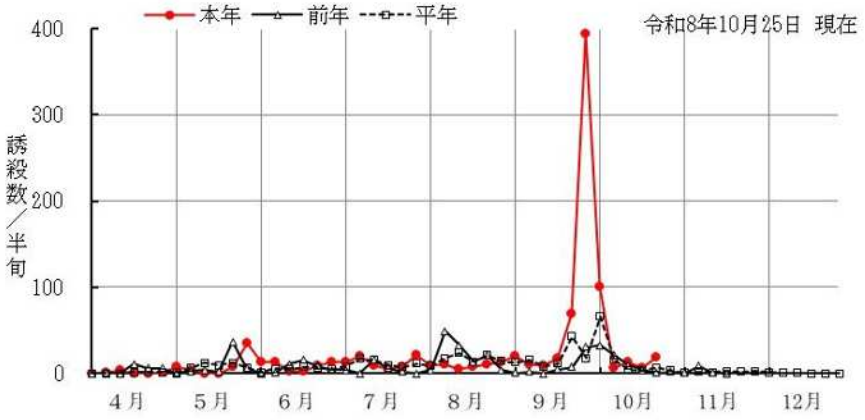
ウ　防除上注意すべき事項

（ア）若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害するが、エンドウ類では、新芽付近の葉を糸で綴り合わせて食害するので発生の目安にする。

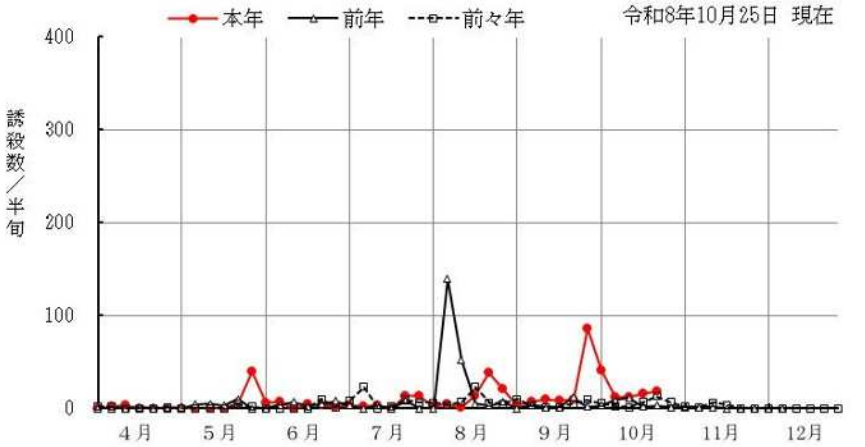
（イ）卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。

（ウ）中・老齢幼虫になると農薬の効果が低下するので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。

（エ）一部のジアミド系農薬（クロラントラニリプロール、フルベンジアミド）に対して感受性低下が認められる。他の使用農薬も含め、散布後の効果を確認する。



フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの誘殺状況（南さつま市金峰町）



フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの誘殺状況（鹿屋市串良町）

※鹿屋市は令和６年度から調査

（３）オオタバコガ（令和８年度技術情報第 18 号、10 月 29 日付け参照）

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作物　　キャベツ、エンドウ類、トマト、ピーマン、イチゴ等

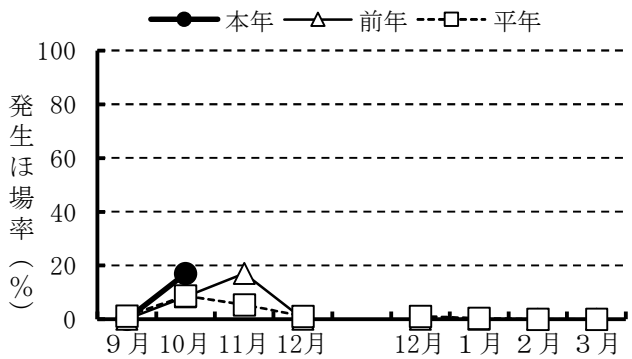
（ウ）発 生 量　　多

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並～多

作物名	発生ほ場率（%）			概評
	本年	前年	平年	
キャベツ	17	8	9	多
エンドウ類	0	0	2	並
ピーマン	13	6	3	やや多
トマト	0	0	5	並
イチゴ	9	9	2	やや多

ピーマン、イチゴでは発生程度は低い（－）



オオタバコガの発生ほ場率（キャベツ）

９～10 月のフェロモントラップ誘殺数：多

	南さつま市	鹿屋市
発生量	多	多※
総誘殺数（９月６半旬～10月５半旬）	28頭（平年９頭）	８頭（４頭）

＊鹿屋市は令和６年度から調査地点を変更したため、前年比による概評を記載

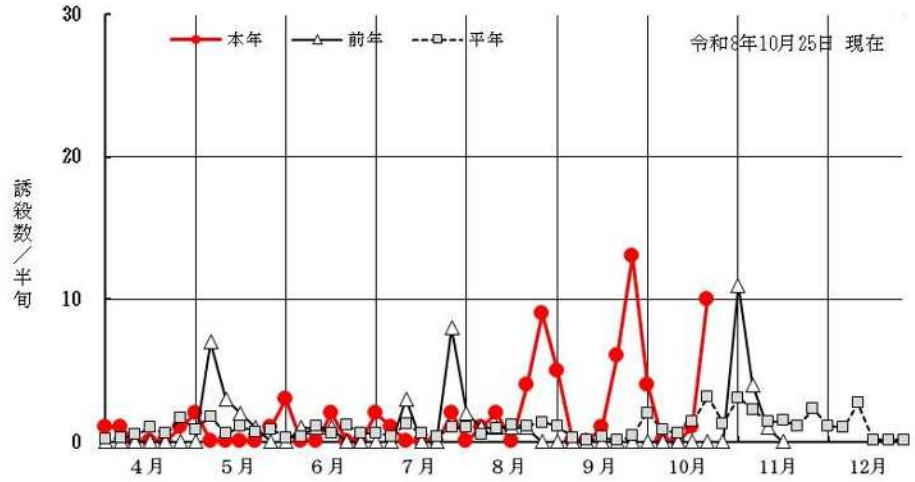
（イ）気象予報

気温：高い（＋）

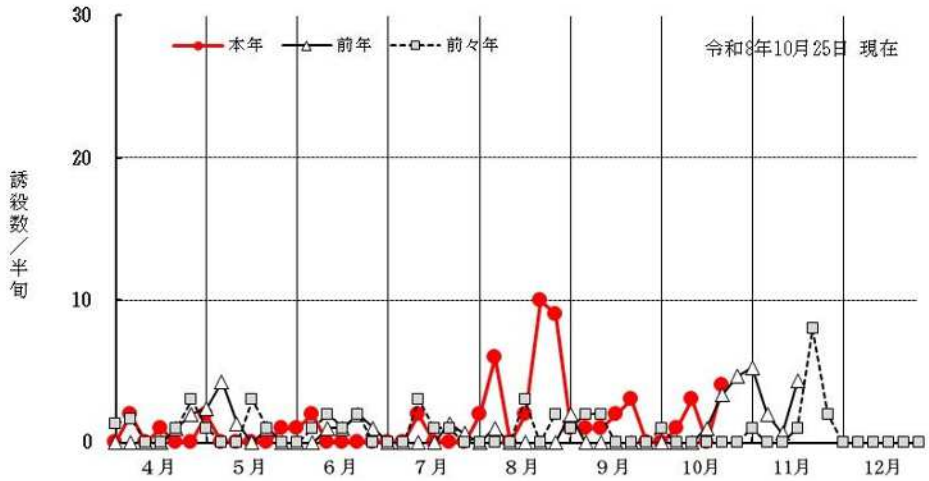
ウ　防除上注意すべき事項

（ア）ふ化幼虫は新葉や蕾から食害を始め、キャベツでは結球部、エンドウ類では新芽や花蕾、ピーマン、トマト等では果実に食入する。ほ場内をよく観察し、早期発見と早期防除に努める。

（イ）中・老齢幼虫になると農薬の効果が低下するので、防除は若齢幼虫時期に行う。



フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺状況（南さつま市金峰町）



フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺状況（鹿屋市串良町）

※鹿屋市は令和６年度から調査

Ⅲ．花き

１．キク

（１）ハダニ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土（施設）

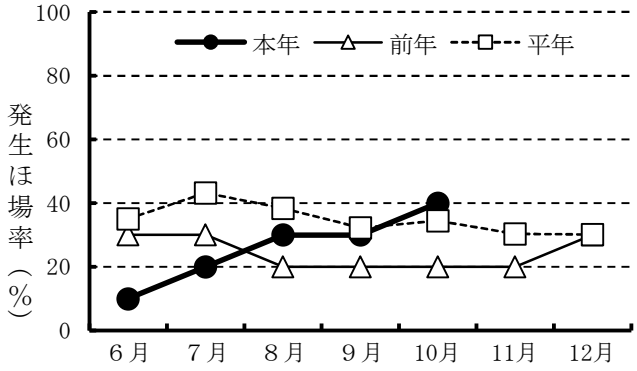
（イ）発 生 量　　多

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：多

発生ほ場率 40%（平年 34%）：やや多

発生程度の高いほ場を認めた（＋）



ハダニ類の発生ほ場率（県本土 施設）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する場合が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

（イ）農薬は、葉裏までよく付着するように散布する。

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（エ）ほ場内及びその周辺の除草に努める。

（２）アザミウマ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県内全域

（イ）発 生 量

県 本 土（施設）　やや多

奄美地域（露地）　やや少

イ　予報の根拠

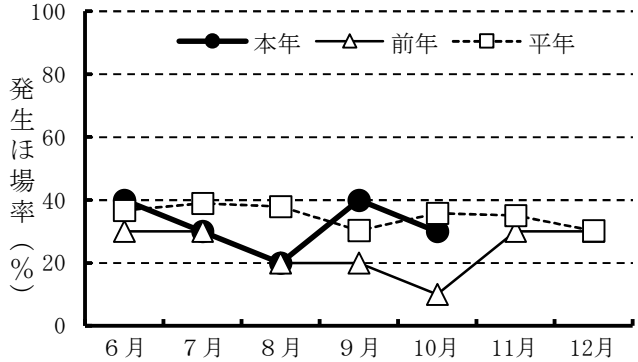
＜県本土（施設）＞

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率 30%（平年 36%）：並

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



アザミウマ類(被害葉)の発生ほ場率（県本土施設）

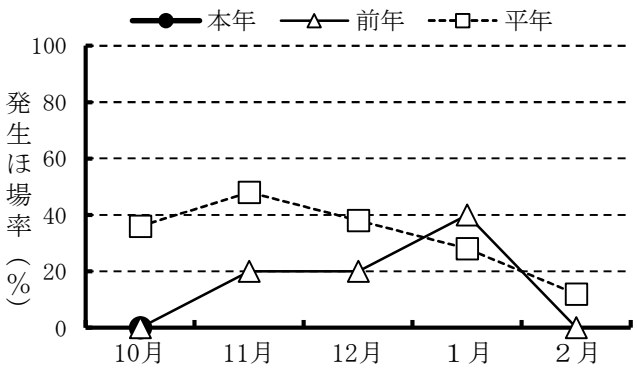
＜奄美地域（露地）＞

（ア）調査結果　発生量：少

発生ほ場率０%（平年 36%）：低い

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



アザミウマ類（被害葉）の発生ほ場率（奄美地域 露地）

※２月の平年値は過去５カ年平均

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）アザミウマ類（クロゲハナアザミウマを除く）の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

（イ）クロゲハナアザミウマは、主に中下位葉に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め発生が認められた場合は、農薬が中下位葉の葉裏まで付着するよう丁寧に散布する。

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（エ）アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（ＴＳＷＶ）とキク茎えそ病の病原ウイルス

（ＣＳＮＶ）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。
（オ）ほ場内及びその周辺の除草に努める。
（カ）母株や苗は導入時に、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生がないか確認し、持ち込まないようにする。

Ⅳ．果　樹

１．カンキツ

（１）かいよう病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県内全域

（イ）発 生 量

県本土・熊毛地域（果実）　　多

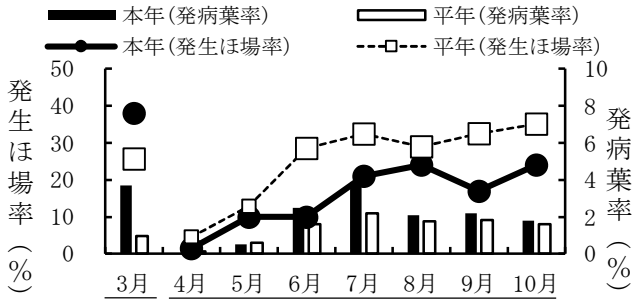
奄　美　地　域（果実）　　多

イ　予報の根拠

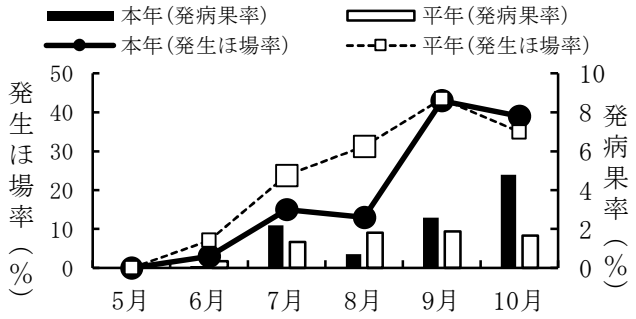
＜県本土・熊毛地域＞

（ア）調査結果

	春　葉	果　実
発　生　量	やや少	やや多
発生ほ場率	24%（平年 35%）：やや低い	39%（平年 35%）：並
発　病　率	1.8%（平年 1.7%）：並	4.8%（平年 1.7%）：高い
		発生程度の高いほ場を認めた（＋）



かいよう病の発生ほ場率と発病葉率
（県本土・熊毛）



かいよう病の発生ほ場率と発病果率
（県本土・熊毛）

（イ）気象予報

降水量：多い（＋）

＜奄美地域＞

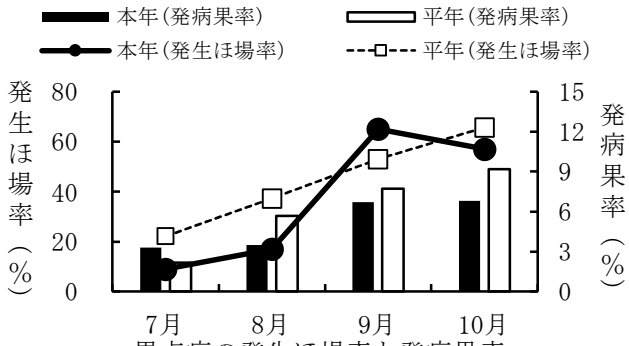
（ア）調査結果

	春　葉	果　実
発　生　量	少	多
発生ほ場率	０％（平年 14%）：低い	43%（平年 11%）：高い
発　病　率	０％（平年 0.1%）：低い	1.6%（平年 0.2%）：高い

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）罹病した夏秋梢やミカンハモグリガの食害を受けた夏秋梢はせん除し、伝染力の強い越冬病斑を少なくする。

（２）黒点病



黒点病の発生ほ場率と発病果率
（果実,県本土・熊毛）

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県内全地域

（イ）発 生 量

県本土・熊毛地域　　並

奄　美　地　域　　並

イ　予報の根拠

＜県本土・熊毛地域＞

（ア）調査結果　　発生量：やや少

発生ほ場率 57%（平年 66%）：やや低い

発病果率 6.8%（平年 10.8%）：やや低い

（イ）気象予報

降水量：多い（＋）

＜奄美地域＞

（ア）調査結果　　発生量：並

発生ほ場率 ０%（平年 ７%）：並

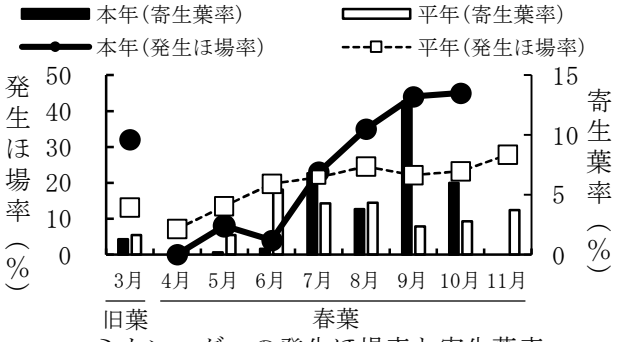
発病果率 ０%（平年 0.6%）：並

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）多雨が予想される場合には予防散布を行う。

（イ）伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

（３）ミカンハダニ



ミカンハダニの発生ほ場率と寄生葉率
（県本土・熊毛）

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県内全域

（イ）発 生 量

県本土・熊毛地域　　多

奄　美　地　域　　多

イ　予報の根拠

＜県本土・熊毛地域＞

（ア）調査結果（春葉）　　発生量 ：多

発生ほ場率 45%（平年 23%）：高い

寄生葉率　6.0%（平年 2.7%）：高い

＜奄美地域＞

（ア）調査結果（春葉）　　発生量 ：多

発生ほ場率 43%（平年 ９%）：高い

寄生葉率　1.9%（平年 0.8%）：やや高い

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）１葉当たり雌成虫数 0.5～1.0 頭（寄生葉率で 30～40%）を目安に防除する。

（イ）薬剤抵抗性を生じさせないため、同一系統、同一殺ダニ剤の使用は年１回とする。

防除に関する今月の留意事項

１．果樹共通

（１）果実吸蛾類

果実吸蛾類の成虫は、果実を吸汁・加害し腐敗・落果させる。夜間に活動し、果皮の薄いカンキツに集まりやすい。

ア　幼虫の食草（アケビ、ムベ、アオツヅラフジ等）除去や夜間に成虫捕殺、防蛾網（7.5～10mm目）を設置する。

イ　恒久的な対策として、黄色忌避灯を主体とした集団点灯を行う。

Ⅵ．茶　樹

１．チャ

（１）カンザワハダニ

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　多

イ　予報の根拠

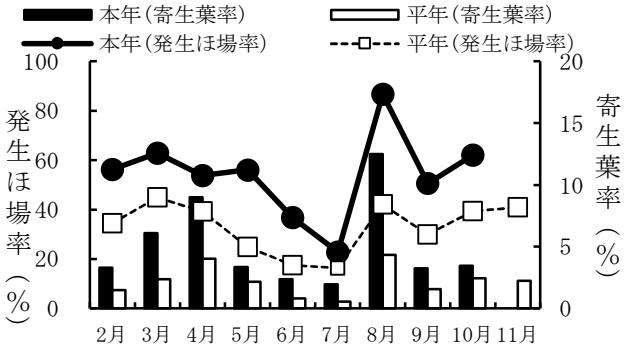
（ア）調査結果　発生量：多

発生ほ場率 62%（平年 39%）

：高い

寄 生 葉 率 3.4%（平年 2.4%）

：並



カンザワハダニの発生ほ場率と寄生葉率

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）越冬前のカンザワハダニの密度は翌春の発生量に大きく影響する。発生の多い園では秋整枝直後と 11 月中旬～下旬に防除を行う。

（イ）農薬は、葉裏まで十分に付着するように散布する。

防除に関する今月の留意事項

１．チャトゲコナジラミ

10 月中旬の発生量は平年並みだが、一部地域では発生程度の高いほ場がみられた。多発するとほ場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

（１）秋整枝および裾刈りは、寄生葉を除去し密度低下が期待される。

（２）発生の多い園では秋整枝後に農薬を葉裏まで十分に付着するように散布する。

（３）本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない農薬を使用する。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1．使用前にラベルや説明書をよく読む。
　決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2．使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3．散布前には防除器具の整備・点検をする。
4．体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5．散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6．クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で 10 日以上被覆する。
7．毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8．使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9．農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10．農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

○調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
○野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
○調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
○気象予報は、向こう 1 か月の長期予報。
○平年値は原則として過去 10 年間の平均値を使用。